「非海大卒」将官考

山口　宗之*

A Study of "Non-graduate Admirals from the Naval Admiral Staff College."

Muneyuki YAMAGUCHI

Abstract

826 officers among the 17～47th 3407 graduates from the Naval Academy were promoted above Rear Admiral.

439 Admirals of these were non-graduate Admirals from the Naval Admiral Staff College, and 95 Admirals were promoted above Vice Admiral.

In these ranks, most admirals graduated from the Naval Admiral Staff College.

はしがき

筆者は別論において日本陸軍の将校養成制度が確立した士官学校１期生より33期生に至る間，少将以上に進級した2,476名（皇族および死後昇任者を除く）のうち半数近くの1,123名は陸軍大学校およびこれに準ずる経歴を持たぬノン・キャリア「無天組」であり，うち182名が中将以上に進級している事実をあきらかにした。[1)]

本論においても同様な視角に立ち日本海軍将官の昇任の条件が海軍大学校（以下「海大」と略称）卒業資格の有無とどう関連しているかについて調査を試みた。資料として用いたのは『陸海軍将官人事総覧〈海軍篇〉』（以下，『総覧』と略称）を主とし，他２，３の刊行物を適宜使用した。

日本海軍現役将校の養成機関たる海軍兵学校（以下，「海兵」と略称）は明治６（1873）年11月卒業の第１期から最後の78期まで一連の期数となっており，陸軍と異なる。そこで陸軍士官学校１～33期に対応すると考えられる第17期（明治25年５月23日少尉任官）から第47期（大正９〈1920〉年８月１日少尉任官）に至る間を考察の対称とした。

海軍軍人の人事が海軍大臣の専行事項であったのは陸軍と同様であるが，進級の目途となったのは「人物よりも成績，現在の実力よりも経験を重視した傾向」があり，「ある軽度の年功序列を保ちながら，他の一面では有為，有能の者の抜擢」を行うことになっており，海兵出身者にあっては「大過なく健康で普通に勤務すれば，大佐までは進級させることを内則としていた」。また「将来，枢要配置に使用しようとする者に対しては，術科に関係なく広く材を集めて高級教育を行なう海軍大学校に入学せしめ」ることとしたが，「大佐から少将に進級させる時は，当人に対するそれ以前八年間の考課表を精査」して行ったといわれている（「海軍人事制度とその運用について」『総覧』）。これに留意しつつ以下考察をすすめることとする。

１．数量的整理

まず数量的整理をこころみる。

第１表

期	任官年月日	任官数	将官数	非海大卒将官数	百分率
17	明治25・５・23	88	23	21	91
18	27・３・１	61	16	13	81
19	27・９・25	50	10	6	60
20	28・３・１	31	11	10	91
21	28・12・27	32	14	11	79
22	30・１・26	24	7	4	57

＊教養部
平成７年９月22日受理

23	31・1・14	19	8	5	63
24	31・4・1	18	10	4	40
25	32・2・1	32	12	5	42
26	31・1・12	59	24	13	54
27	34・1・18	113	23	14	61
28	35・1・18	105	24	10	42
29	36・1・23	125	17	4	24
30	36・12・28	187	34	18	53
31	37・9・10	188	31	18	58
32	38・8・31	192	32	15	47
33	39・12・20	171	32	14	44
34	40・12・20	175	27	11	41
35	41・12・25	173	30	8	27
36	43・1・15	191	38	11	29
37	43・12・15	179	48	18	38
38	44・12・1	149	38	20	53
39	大正1・12・1	148	46	26	57
40	2・12・1	144	48	31	65
41	3・12・1	118	43	28	65
42	4・12・13	117	47	31	66
43	5・12・1	95	42	29	69
44	6・12・1	95	36	16	44
45	7・8・1	89	28	12	43
46	8・8・1	124	22	9	41
47	9・8・1	115	5	4	80
	(計)	3,407	826	439	53

これによれば17～47期の間海軍少尉に任じられた者の総数3,407名，うち少将以上に昇任した者826名，昇任率24.2％となる。これは同じ時期の陸軍が17,574名中2,476名，14％であるのに比しかなりの高率である。

つぎに海大卒業でない者は439名で海大卒との対比は53％となる。陸軍「無天」組将官が45％であるのにくらべ，海兵卒業のみで少将以上に昇任した割合ははるかに高い。

つぎに期毎でみると31期にわたるなか，18期分で「非海大卒」組が優位に立っている。ただし日露戦争直前任官の29期では海大卒が76％，終結後任官の35・36期も海大卒が70％以上を占めている。いっぽう日清戦争期前後の17～21期では「非海大卒」組が大多数であったが，前述のごとく日露戦争前後の一時期半分以下になり，明治末～大正初期ふたたび過半数となった。これによれば日本海軍将官の多数派は「非海大卒」組が占めていたというべきであり，陸大出身者（「天保銭」組）が過半数であった陸軍将官とは対照的であったということができる。

2．中将以上昇任者の分析

つぎに中将以上に昇任した「非海大卒」組将官を列挙し（第2表），整理する（第3表）。

第2表

期	将官数	海大出身者数	序列	氏名	少将進級	中将進級	大将進級	金鵄勲章	外国駐在
17	23	2	1	秋山真之	大正2・12・1	大正6・12・1		功3	アメリカ
			3	山路一善	3・12・1	7・12・1		功3	イギリス
			4	森山慶三郎	〃	〃		功3	フランス
			6	吉田増次郎	5・12・1	9・12・1		功4	清
			7	川原袈裟太郎	〃	〃		功4	
			8	斎藤半六	〃	〃		功3	
			9	山岡豊一	6・12・1	10・12・1		功4	
			10	山口鋭	〃	〃		功4	ドイツ
			11	河田勝治	〃	11・6・1		功4	
18	16	3	1	加藤寛治	5・12・1	9・12・1	昭和2・4・1	功3	ロシア
			2	安保清種	〃	〃	〃	功4	イギリス
			3	佐藤皐蔵	〃	〃		功2	イギリス
			5	松村純一	6・12・1	10・12・1		功4	
			8	大橋省	4・12・13	9・12・1		功4	(機関)
19	10	3	3	中島資明	6・12・1	10・12・1		功4	
			5	小林研蔵	8・6・1	12・12・1		功4	
			8	平塚保	5・12・1	10・12・1		功4	(機関)
			9	水谷千万吉	6・6・1	11・12・1			
20	11	1	2	竹内重利	7・12・1	〃		功4	アメリカ
			3	中里重次	〃	〃		功4	イギリス

			4	桑島省三	8・12・1	12・12・1		功4	
21	14	1	1	古川鉞三郎	8・6・1	〃		功4	イギリス
			2	金田秀太郎	8・12・1	〃		功4	イギリス
			3	山内四郎	〃	12・11・10			
			5	正木義太	9・12・1	13・12・1		功3	イギリス
22	7	2	0						
23	8	3	4	大谷幸四郎	9・12・1	13・12・1			
24	10	4	0						
25	12	5	0						
26	24	2	2	野村吉三郎	11・6・1	15・12・1	昭和8・3・30	功2	オーストリア・ドイツ
			4	長沢直太郎	11・12・1	〃		功4	
27	23	5	5	小山田繁蔵	12・12・1	昭和2・12・1			
28	24	6	2	波多野貞夫	〃	〃			ドイツ（工博）
			6	上田良武	13・12・1	3・12・10		功4	アメリカ
			9	岸科政雄	14・12・1	4・11・30			
29	17	7	5	谷口美貞	〃	〃			
			6	米村末喜	〃	〃			
30	34	7	6	松浦松見	15・12・1	6・12・1			イギリス
			9	重岡信治郎	昭和2・12・1	〃			
31	31	9	4	枝原百合一	〃	7・12・1			
			10	市村久雄	3・12・10	8・11・15			
			11	津田静枝	4・11・30	9・11・15			
			12	後藤　章	〃	〃		功4	
32	32	13	8	前原謙治	〃	〃			イギリス
			10	大野　寛	〃	〃			
33	32	11	6	坂野常善	5・12・1	〃		功4	
			8	小野弥一	6・12・1	10・11・15			
			13	杉坂悌二郎	7・12・1	11・12・1			
34	27	8	9	和田専三	8・11・15	12・12・1			
			11	大田垣富三郎	〃	〃			
35	30	12	6	川瀬義重	9・11・15	13・11・15			
36	38	16	11	砂川兼雄	10・11・15	14・11・15			
			15	茗荷秀雄	11・12・1	15・11・15			
37	48	14	5	太田泰治	〃	〃		功3	
			13	後藤英次	12・12・1	16・10・15		功3	
			16	高坂三二郎	〃	〃			
			18	茂原慎一	〃	〃			
			19	樋口修一郎	〃	〃			
			20	椛島節雄	13・11・15	17・5・1			
			21	桑原虎雄	〃	〃		功3	
			22	原　顕三郎	14・11・15	17・11・1		功3	
38	38	14	6	松浦永次郎	12・12・1	16・10・15			
			11	小林徹理	13・11・15	17・5・1			
			12	栗田健男	〃	〃			
			17	武田盛治	〃	〃			
			19	藤田類太郎	14・11・15	18・5・1		功4	
			20	久保九次	15・11・15	19・5・1			
39	46	19	2	和田　操	12・12・1	16・10・15			
			9	相馬六郎	13・11・15	17・11・1			イギリス
			18	平岡粂一	14・11・15	18・5・1			
			20	神保勉一	〃	〃			

			24	畠山耕一郎	〃	〃			
			25	西村祥治	15・11・15	18・11・1			
			26	田村英	〃	19・5・1			
			27	入船直三郎	〃	〃			
			28	原田清一	〃	〃			
			29	広瀬末人	16・10・15	20・5・1			
			30	工藤久八	〃	〃			
			31	鎌田道章	〃	〃		功4	
			32	竹中竜三	〃	〃		功3	
40	48	16	9	大西滝治郎	14・11・15	18・5・1		功3	イギリス・フランス
			12	多田武雄	15・11・15	18・11・1			
			13	醍醐忠重	〃	〃			
			16	丸茂邦則	14・11・15	〃			
			18	吉良俊一	15・11・15	〃		功4	
			22	石川茂	16・10・15	19・10・15		功4	
			23	宮里秀徳	〃	〃		功4	
			24	左近允尚正	〃	〃			
			25	森国造	17・5・1	20・5・1			
			26	木村進	〃	〃			
41	43	13	1	中島省三郎	15・11・15	18・11・1			アメリカ
			2	前田稔	〃	〃			ポーランド
			5	松永貞市	〃	〃			
			6	酒巻宗孝	〃	〃		功4	アメリカ
			10	一瀬信一	〃	19・5・1			
			11	木森仙太郎	〃	〃		功4	
			14	田中頼三	16・10・15	19・10・15			
			18	上野敬三	〃	〃		功4	
42	47	8	9	安場保雄	〃	20・5・1			
	(計)	204 (うち大将 29)		95名 (うち大将3)					

第3表

	海大卒	非海大卒	百分率
少　将	183	344	65
中　将	175	92	34
大　将	29	3	9
計	387	439	53

中将以上に昇任した者の総数299名，全将官826名で占める割合は36％となる。このうち海大出身者は204名68％に達し，非海大卒・海兵卒業のみは95名，歴然たる少数派となった。さらに大将昇任者32名のうち29名は海大出身者であり，海兵のみで大将になったのは3名，26期明治33年1月少尉任官の野村吉三郎を最後としている。陸軍が陸大出身者を重視したのに反し，海軍は必ずしも海大出を万能視しなかったともいわれる[2]。しかし実際には中将以上昇任者の大部分は海大出身であり，なかんずく諸制度が安定したとみられる明治中期以後は海軍大将即海大出身者という図式が定着したというべきである。

それでは非海大卒組の中将以上昇任の条件は何であったろうか。「人物よりも成績」「現在の実力よりも経験」を重んじた海軍の人事において客観的評価資料となるものは軍人の功績で最も重んじられる金鵄勲章であろう。95名のうち功2級2名，功3級12名，功4級21名，計35名が受章者である。つぎに在外武官として外国駐在の経歴をしらべると23名がイギリス・アメリカ・フランス・ドイツ等の経験者であった。このうち金鵄勲章のみが24名，外国駐在のみが6名，両者重複する者が17名である。

これによって類推するに金鵄勲章所持が外国駐在経験の有無を上まわって昇任の条件となっていたように考え

ることができるであろう。

3．海大組と「非海大卒」組の序列と進級

つぎに該当各期における海大出身最右翼と「非海大卒」最上位者との間で，大佐以後の進級のあとを比較してみたい（第4表，一部重複）。

31期にわたるなかで初期の17，18，21各期はともかくとして昭和中期少将昇任の41，43，47の各期において「非海大卒」組が海大出身者を抑え，とくに43期は海大優等をおしのけ序列1位を占めていることは特筆すべきであろう。対応する陸軍では陸大出が終始各期序列1位を占めていることを考えればなおさらである。

第4表

期	海大卒*	序列	氏名	大佐	少将	中将	大将	金鵄勲章	外国駐在
17		1	秋山真之	明治41・9・25	大正2・12・1	大正6・12・1		功3	
	*	2	田所広海	〃	3・12・1	7・12・1		功4	ドイツ
18		1	加藤寛治	41・12・1	5・12・1	9・12・1	昭和2・4・1	功3	
	*	4	吉田清風	44・12・1	〃	〃		功3	
19	*	1	百武三郎	大正1・12・1	6・12・1	10・12・1	3・4・1	功4	ドイツ・オーストリア
		3	中島資明	〃	〃	〃		功4	
20	*優等	1	斎藤七五郎	2・12・1	7・12・1	11・12・1		功4	アメリカ・イギリス
		2	竹内重利	〃	〃	〃		功4	アメリカ
21		1	古川鉞三郎	3・12・1	8・6・1	12・12・1		功4	イギリス
	*	3	藤原英三郎	〃	8・12・1	〃			
22	*	1	吉川安平	〃	〃	〃		功4	イギリス
		4	古川弘	4・12・13	9・12・1				
23	*	1	松村菊男	〃	〃	13・12・1		功4	フランス
		4	大谷幸四郎	〃	〃	〃			
24	*	1	山本英輔	〃	〃	〃	6・4・1	功4	ドイツ
		7	花房太郎	5・12・1	10・12・1				
25	*	1	山梨勝之進	〃	〃	14・12・1	7・4・1		
		7	宮治民三郎	〃	〃				アメリカ・イギリス
26	*優等	1	小林跡造	6・4・1	11・6・1	15・12・1	8・3・30		アメリカ・イギリス
		2	野村吉三郎	〃	〃	〃	〃	功2	ドイツ・オーストリア
27	*	1	中村良三	7・12・1	12・12・1	昭和2・12・1	9・3・30		
		5	小山田繁蔵	〃	〃	〃			
28	*	1	永野修身	〃	〃	〃	9・3・30	(昭和18・6・21元帥)	
		2	波多野貞夫	〃	〃	〃		(工博)	ドイツ
29	*	1	高橋三吉	9・12・1	14・12・1	4・11・30	11・4・1		
		5	谷口美貞	〃	〃	〃			
30	*	1	百武源吾	〃	〃	5・12・1	12・4・1		アメリカ
		6	松浦松見	10・12・1	15・12・1	6・12・1			イギリス
31	*	1	加藤隆義	11・12・1	昭和2・12・1	7・12・1	14・4・1	功3	フランス
		4	松原百合一	〃	〃	〃			
32	*	1	塩沢幸一	12・12・1	3・12・10	8・11・15	14・11・15	功2	イギリス
		8	前原謙治	13・12・1	4・11・30	9・11・15			イギリス
33	*優等	1	豊田貞次郎	〃	5・12・1	10・11・15	16・4・1		イギリス
		6	坂野常善	〃	〃	9・11・15		功4	
34	*	1	古賀峯一	15・12・1	7・12・1	11・12・1	17・5・1	功1	フランス
		9	和田専三	昭和2・12・1	8・11・15	12・12・1			
35	*	1	近藤信竹	〃	〃	〃	18・4・29	功2	ロシア・ドイツ
		6	川瀬義重	3・12・10	9・11・15	13・11・15			
36	*	1	沢本頼雄	〃	〃	〃	19・3・1		イギリス
		11	砂川兼雄	4・11・30	10・11・15	14・11・15			
37	*	1	井上成美	〃	〃	〃	20・5・15	功3	スイス

		5	太田泰治	5・12・1	11・12・1	15・11・15		功3	
38	*	1	原清	〃	〃	〃			アメリカ
		6	松浦永次郎	6・12・1	12・12・1	16・10・15			
39	*優等	1	田結穣	〃	〃	〃		功3	イギリス
		2	和田操	〃	〃	〃			
40	*優等	1	岡新	7・12・1	13・11・15	17・11・1		功3	イギリス
		9	大西滝治郎	8・11・15	14・11・15	18・5・1		功3	イギリス・フランス
41		1	中島清三郎	9・11・15	15・11・15	18・11・1			アメリカ
	*	3	中原義正	〃	〃	〃		功2	アメリカ
42	*	1	小林謙五	10・11・15	16・10・15	19・10・15			アメリカ
		9	安場保雄	〃	〃	20・5・1			
43		1	浜野力	11・12・1	17・11・1				アメリカ
	*優等	2	矢野志加三	〃	〃	20・11・1			イギリス
44	*	1	島本久五郎	12・12・1	18・5・1				アメリカ
		12	黒田麗	13・11・15	19・5・1				
45	*	1	中村勝平	〃	18・11・1			功4	アメリカ
		8	長井満	〃	19・5・1				
46	*優等	1	高田利種	14・11・15	19・10・15			功3	ドイツ
		2	松尾実	〃	〃				イギリス
47		1	川畑正治	15・11・15	20・5・1				ロシア
	*	2	横山一郎	〃	〃				アメリカ

また序列1位の海大出身者に対し同期「非海大卒」組が同時進級している例が少将において19例，中将において16例ある。さらに大将にまで登りつめた32例をみると次のごとくである（第5表，一部重複）。

すなわち「非海大卒」組3人のうち18期加藤寛治・安保清種は同期海大出身者の最右翼たる序列4位の吉田清風を抑えて1，2位を占めた。吉田は中将まで同時進級してきたが中将止まりに終ったのである。つぎに26期野村吉三郎は同期海大優等の小林跻造につづいて序列2位，大佐以後つねに同時進級を果しているのである。なお加

第5表

期	海大卒*印	序列	氏名	大将進級	金鵄勲章	外国駐在
18		1	加藤寛治	昭和2・4・1	功3	ロシア
		2	安保清種	〃	功4	イギリス
19	*	1	百武三郎	3・4・1	功4	ドイツ・オーストリア
	*	2	谷口尚真	〃	功4	アメリカ
24	*	1	山本英輔	6・4・1	功4	ドイツ
	*	2	大角岑生	〃		ドイツ
25	*	1	山梨勝之進	7・4・1		
26	*	1	小林跻造	8・3・30		イギリス・アメリカ
		2	野村吉三郎	〃		ドイツ・オーストリア
27	*	1	中村良三	9・3・30		
	*	2	末次信正	〃		イギリス
28	*	1	永野修身	〃		アメリカ
29	*	1	高橋三吉	11・4・1		
	*	2	藤田尚徳	〃	功4	イギリス
	*	3	米内光政	12・4・1	功1	ロシア
30	*	1	百武源吾	〃		アメリカ
31	*	1	加藤隆義	14・4・1	功3	フランス
	*	2	長谷川清	〃	功1	アメリカ
	*	3	及川古志郎	14・11・15	功1	

32	*	1	塩沢幸一	〃	功2	イギリス
	*	2	山本五十六	15・11・15	功2	アメリカ
	*	3	吉田善吾	〃		
	*	4	島田繁太郎	〃	功2	イタリア
33	*	1	豊田貞次郎	16・4・4		イギリス
	*	2	豊田副武	16・9・18	功2	イギリス
34	*	1	古賀峰一	17・5・1	功1	フランス
35	*	1	近藤信竹	18・4・29	功2	ロシア・ドイツ
	*	2	高須四郎	19・3・1	功2	イギリス
	*	3	野村直邦	〃	功2	ドイツ
36	*	1	沢本頼雄	〃		イギリス
	*	2	塚原二四三	20・5・15	功2	
37	*	1	井上成美	〃	功3	スイス

藤寛治と野村吉三郎は海兵18期・26期においてそれぞれ卒業時の代表生徒となっていた事実（鎌田芳郎『海軍兵学校物語』付録，昭和54年原書房）もあわせ考えて置くべきであろう。

もちろん32名にのぼる海軍大将のうち29名が海大出身者であること，31期中で序列1位が25期分にわたり海大出によって占められているという事実は明白であり，日本海軍の首脳が海大出身者によって握られていたのは争うべくもないことといわねばならない。

しかし40期「非海大」組大西滝治郎の場合は注目すべきであろう。海大2次試験受験時料亭で飲酒し，態度の悪い芸妓に暴行を加えた事実が新聞に報じられたため試験停止を命じられ，翌年以後の受験も禁じられた。しかるに大西はこの期の将官48人中序列9位を占め，序列1位海大優等卒業の岡新に比し大佐・少将で1年，中将昇任では6カ月の差をもってつづいた。そして昭和20年5月19日軍令部次長の要職にまでのぼりつめていることは刮目するに足ろう（『日本海軍指揮官総覧』平成7年新人物往来社，40～41頁）。「無天」組でありながら陸軍大将にのぼりつめた鈴木孝雄の唯一例があるものの，陸軍3長官のひとつ参謀総長につぐ参謀次長に就任した「無天」組が皆無であったことを並考するとき，海軍において「非海大卒」組は海大出身者とくらべ差別・冷遇されることはなかったというべきである。

4．軍令承行令と特務士官の問題

以上海軍将官の昇任の次第をあとづけてきたことによって日本海軍では海大卒業資格の有無にかかわらず，いうところの「ある程度の年功序列を保ちながら，他の一面では有為，有能の者の抜擢」が行われてきた事実を推考することができる。この点「無天」組優秀者の多くを少将ついで中将にまで進級させながら，中央の要職・統帥の責任ポストを「天保銭」組が独占した陸軍と対照的であった。

しかし海軍には次のような事実が存在していたことを忘れてはならない。艦船部隊の指揮権（軍令承行令）を海兵出身現役兵科将校が独占したため，機関学校出身現役将校との間に感情の疎隔を生じたこと（『総覧』28頁），兵・下士官から刻苦勉励し幹部に列せられた者を区別して特務少尉・中尉・大尉と呼称し[3]兵器・機関その他現場の実務を担当させながら責任ある部署につけず，つねに補佐役たる「掌長」に甘んじさせ，服装上にも無用ともいうべき格差をつけたこと，[4]等は重大である。

この点，兵からスタートした努力家のため「少尉候補者制度」を作った陸軍では陸軍士官学校出身「士官候補生」と並ぶ現役将校補充制度と位置づけて人事・服装上の区別が一切なかった。また昭和20年2月軍隊構成上の重要ポストである独立歩兵連隊長に少尉候補者出身の中佐を補職し「揃って立派な部隊長である，との評を得」た陸軍（額田坦『陸軍省人事局長の回想』〈昭和52年芙蓉書房〉55頁）とくらべた場合，海軍のいう「有為，有能の者の抜擢」というう たい文句にかなりの疑問を寄せざるを得ない。

むすび

明治25年5月23日少尉任官の海兵17期から大正9年8月1日任官の47期にわたる間，現役兵科将校としてスタートした者3,407名，その中で少将以上に昇任した者826名がいた。このうち海大卒の学歴を持たぬ「非海大卒」組が439名おり，海大出身者をおさえて過半数を占めていた。

しかし中将以上299名のうち「非海大卒」は95名，大将

32名のうち「非海大卒」は3名のみ，ここでは完全に少数派に転落した。この点からみて海軍でも陸軍同様海大出身者が明治中期以後首脳部の大勢を占めたというべきである。

いっぽう31期にわたる海兵各期出身者の将官序列をみると「非海大卒」が海大をおさえ序列1位となった例が6期にわたること，序列1位の海大出に対し「非海大卒」の少将同時進級例19，中将で16例あったこと，「非海大卒」大将が3例あり18期の2名はこの期の序列1・2と大将とを独占したこと，26期1名は同期序列1位海大出と大佐以後つねに同時進級し大将に親任されていること，40期「非海大卒」が軍令部次長の要職についていること，等は陸軍将官と異なる海軍人事の特色というべきである。これらが海軍軍人の進級の目途とされた「人物よりも成績，現在の実力よりも経験を重視」したこととどのように関連するものなのか，更に兵・下士官から抜擢し幹部に列せしめた者を「特務士官」として区別し責任部署につけなかったような施策とどう結びつくものか，また航空特攻にあたり海兵出少尉を温存し99.9%学生出身予備役少尉を先に出撃させている事実[5]がどのような論理から打ち出されたものなのか，等今後詳考されるべきであろう。

註

1）「いわゆる〝無天〟将官に関する一考察」（『皇学館論叢』28巻6号〈平成7年12月皇学館大学人文学会〉）。

2）責任ある文辞とはいえないが，海兵では学業のみならず操行も含めうるさく評価したけれども海大では卒業点数のみによって序列をきめた。このため海兵の卒業成績順位が重んぜられたといわれる（児島襄『参謀』〈昭和47年文芸春秋社〉50頁）。また海軍の人事行政は学校の卒業成績，書類，報告論文の書き方，しゃべり方がうまく見かけ姿勢の上手な能吏型を重要視する傾向があったともいわれる（陸上自衛隊幹部学校修親会編『統率の実際』3〈昭和49年原書房〉118頁）。

3）昭和17年11月1日機関科将校・特務士官の名称を廃止して兵科将校に統合したため，名目上特務士官はなくなった。なおこれ以前においても特務士官が少佐に進級すれば特務の呼称はなくなり，海兵出身と同等の兵科少佐として扱われる規定となっていた。終戦のころ累進して中佐に昇った者もあったという（『総覧』23頁）。

4）①一種軍装（冬服）の袖章の所に3個の桜花をつける。②二種軍装（夏服）外套の肩章の金モールの幅を半分にする。③雨衣・マントの襟の桜花の色を海兵出の金色に対し銀色とする，等（近藤太『海軍特務士官の記録』〈昭和47年私家版〉98頁）。

5）小論「特攻隊史研究の一視点」（『久留米工業大学研究報告』18，1994年）参照。

（平成7・9・9）